

書評

Winburn T. Thomas and Rajah B. Manikam,
The Church in Southeast Asia,
 Friendship Press, 1956.

「燈臺下暗し」という言葉があるが、日本の教會はヨーロッパの神學や米國の教會について學ぶのに急であるが、自分の屬するアジアの教會の状況については殆んど知るところが少しし關心の度合も極めて低い。之は基督教會のみに限られたことでなく一般的傾向である。毎年國際學生セミナーに出席して我々日本人が戰爭中に關心を示し足跡を残したアジアの各地の問題から如何に現在日本のインテリは疎遠しているかを痛感させられる。

本書はかかる觀點から日本の基督教者にとつて一讀されるべき書物であると思う。其著者は何れもわが國に親しみのある人達で W・トーマスは京都に長く滞在し、學生基督教運動や社會的基督教の運動に勵んだ人であり、現在インドネシアにて宣教師として東南アジアの教會の發展の爲盡力している。R・マニカムは一九五一年から五年間にわたつて世界教會會議(W・C・C・C.)と國際宣教會會議(IMC)の東アジア地域の幹事として活躍したインド・ルッテル教會の指導者であり、故魚木教授とは親しい交友のあ

つた人である。

本書で東南アジアとして扱われている地域はビルマ、マレー、インドネシア、タイ、インド支那、フィリッピン、臺灣、香港である。夫々の地域の歴史的背景の敘述に初まり、現在の政治的經濟的問題の分析をなし、基督教會の現状と課題を要約している。政治的問題の出て来る度に、戰爭中の日本の残したこれらの地域に於ける足跡が痛ましく反映している。我々日本人がアメリカの原爆や、占領政策を忘れることが出来ないと同様のおもいをこれらの東南アジアの地域の人々は持つてゐることを覺える。戰爭中の日本の統治は次の二つの結果をこの地域の人々にもたらした。一つは住民達が植民地政策から解放され、自由獨立を求める氣運が強くなつたこと、第二は占領政策と戰亂により國內の治安と秩序は失われ、經濟的に精神的に不安の中に置かれるに至つたことである(七頁)。各地域に於て基督教會が軍の政策の爲に受けた迫害が記録されている。同時に南ボルネオ(Kaimanian)の如く軍政部に日本の牧師が居た爲に基督教會が信仰の自由を保證された例も公平に記されている(九頁)。

一口に東南アジアと言っても政治的に社會的に複雑多岐な國々が含まれており教會の性格も著しく異なるが本書を一讀して感ずるいくつかの問題點を擧げてみよう。

一、先ず第一に感ずることは、わが國と同様これらの地域に於いてはプロテスタント教會は極く少數者にすぎないということである。フィリッピンのみが基督教徒が多數者を占める國

であるがプロテスタントは全人口の三パーセントに過ぎない。ビルマ、タイ、インド支那、臺灣は佛教が主な宗教であり、インドネシアはイスラム、マレーは兩者が相半ばしており、東南アジアの全人口約一億八千萬の内プロテスタントの数は約六一八萬で三%を占めるに過ぎない。このことは少くとも二つ問題を我々に提示する。一つは果して基督教會がそれらの大多數を占める既成宗教に對する深い理解を持ち、異教的地盤に根をおろした共同體として證しをなしているであろうかという問題である。單なる客觀的比較宗教學でなく、又兩者の間に融合を見出すのでもなく、それらの既成宗教の教理と實踐を適確に理解した上で、福音の辯證をなすべき必要を痛感させられる。アジアこそが東西宗教の相まみゆる場所であるに拘らずアジアの教會にかかる關心が乏しかったと言ふことは大きな問題であると思う。

次に基督者が數に於いて少數者であるということは、如何なる在り方をなしたなら、「隔離せる少數者」でなく、「創造的な少數者」としての活動をなし得るかという課題である。

本書はこの點についてはあまり觸れていない。S・ナイル (Stephen Neill) が近著 *The Unfinished Task*, Edinburgh House Press, 1967 のこの點に觸れているのは非常に興味深い。(同書一六八頁以下)

二、本書を通して受けるアジアの教會の第二の性格はその神學に於いて又教會の組織や禮拜の形式等に於いて著しく西歐的

書 評

であると言ふ點である。著者は「教會的植民地」(Ecclesiastical Colonies) という言葉を用いている(二六四頁)。イスラムや佛教が東南アジアの各地に浸透した一つの理由は、一般の人々の生活や既成の文化の中に滲み込んで行つた點にあることを指摘し、アジアの教會が西歐教會の模倣に流れ勝ちな傾向を鋭く批判している。西歐の文化的又は政治的優越感を前提とした過去の宣教師運動に對して「初代教會に於いては十字架が躓きの石であつたが現代では教會が未信者にとつて躓きの石となることがある」と警告を發している。

三、本書は單に東南アジアの教會の問題を批判的に取り扱つているのではなく、現在進められつつある東南アジアの協力について具體的な示唆ある報告をなしている。かつては個人の宣教師が英雄的勇氣をもつて未開の地に赴いたが、現在では教會の組織を通して夫々の教會の要請に従つて宣教師の活動がなされるべきであり、今後はアジアの教會相互が互に宣教師を送り迎えし、アジアの教會が互に學び合い勵まし合うことが必要であることを説き、西歐の教會は進んでそうした運動を物心兩面から支援すべきであることを力説している。之は先進國から未開の國へ、或いは、所謂基督教國から異教國へという従來の宣教師運動の考え方とは全く異なる新しい考へ方であると思う。先に山崎部長の出席されたバンコックに於ける東西アジア神學校會議や伊藤兄の出席した東南アジアの基督教ジャーナリズムの會議や來年六月マニラで開かれる

基督教研究 第三十卷・第三號

アジア基督教労働者傳道協議會等はアジアの教會が當面する共通の問題を共に學び互に勵まし合わんとする試みの一つであると思う。フィリッピンの教會は既に沖繩、タイ、インドネシアに宣教師を送っている。インドの教會もインドネシアに宣教師を送っている。戦亂の残した暗い蔭の未だ消え去らないこれらのアジアの地域に日本の教會が和解者の役割を果たし共通の問題の荷負い手として奉仕者の務めを果たすべき使命を本書を通して新らしく覺えるものである。

Roland H. Bainton,

Yale and the Ministry,

A History of Education for the

Christian Ministry at Yale from the

Founding in 1701,

Harper and Brothers, 1967.

通常學校の歴史を綴った書物は讀むに退屈なものである。其の學校に學んだものの以外はあまり興味をそそらぬ出來事の羅列に終る事が多い。ベイントン教授のこの書物は聊かおもむきを異にするものがある。ルッテルの優れた傳記「我ここに立つ」(Here I Stand)で既に親しまれている彼の流麗な筆體と彼自らの筆による四十二にのぼる挿繪は讀者の興味をそそる。たとえば故富森教授の恩師フランク・C・ポーターの似顔があるが(p. 219)よくみ

ているとなにか富森先生を思わせるものがある。柔軟さをもった美しい文章であるが、歴史家としての綿密さと手堅い實證性を失つておらず、十九章二九〇頁の中に引用フットノートの數六五一に及んでいるのを見ても解る。

ベイントンは彼が宗教改革史に試みた手法に従い、主として文化的背景を描きつつ、主要人物に焦點を置いて優れた敘述を續けている。主な人物として登場して來る中には Jonathan Edwards, Samuel Seabury, Nathaniel W. Taylor, the two Timothy Dwights, Lyman and Henry Ware Beecher, Horace Bushnell, Charles R. Brown, Benjamin W. Bacon, Frank C. Porter, Douglas C. Macintosh and Williston Walker 等がある。彼らは單に一神學校の歴史を綴っているのみでなく、米國の神學特に所謂ニューイングランド神學の主要な流れを形成するものであり、本書は神學教育という觀點からのみならず米國基督教精神史の觀點から言つて貴重な文獻である。

ベイントンはイエール大學が一七〇一年に「教會と社會に仕えるにふさわしい青年を輩出する」目的を以てピューリタンの間に創設されたことを指摘し、二五六年にわたるその歴史の中にその精神が流れていることを明らかにしている。一九二九年から五一年までにB・D・の學位を得た卒業生の中五十七パーセントは各個教會の仕事に従事している。昨年の卒業生の23は、牧會傳道に携つており「イエールは教師を養成するところで牧師を養成するところではない」という風評の誤解であることを示している。

二五六年のイエールの歴史を通してベイントンの強調するニューイングランド神學の流れは次の三つの點である。即ち宗教改革者の神學と敬虔主義と社會問題に對する關心である。(The Theology of the Reformation, Pietism and the social concern, ... these three, then run through this story. They are not at all times equally apparent in the pattern and certainly not in the narration, but they are continually recurrent. (xii-xiii))

私はこの書を著者からイエール神學校で戴く喜びに接し晩秋の木の葉の舞うキャンパスで靜かに讀み耽つた。口で言い表わさなくとも體にしみわたる様な精神史の傳統がこのアカデミッシュ・ゲマインデの中にある様な感を新らたにした。そして遙か母校同志社のことを考えてみた。僕達のもつ精神的傳統と遺産を想い、Doshisha and the ministry はどんな形でいつの日か描かれるだろうかと考えてみた。

Georgia Harkness,
Christian Ethics,
Abington Press, 1967.

ハークネス女史は太平洋神學校で組織神學を講ずる數少い女子神學者の一人である。昨年 ICU の客員教授と來日され同志社でも二回にわたつて基督教倫理學の講演をされたので、馴染み深い

書評

人である。邦譯された書物は新教出版社から熊澤君の譯で「聖書の理解」が出ている以外は見當らないが、その著書には初期の作品 Calvin, Man and Ethics, 1931 や 一九四八年に、アビントン出版賞を得た Prayer and Common Life 等があり、特に靈的生活の指針となる優れた祈禱や瞑想の書物を出しているのが有名である。

さてこの書、基督教倫理學をハークネスは一つの抱負と自信をもつて書いている。即ち冒頭に「圖書館の書架に基督教倫理についての書物が山積しているのに何故改めて私のを加える必要があるのか」と問い、「それらの書物は私が言いたいと思うことを言い盡していない」故であると説明している(七頁)。それでは女史はこの書物で何を言わんとしているのでしょうか、どういふ點が獨自な基督教倫理として言い盡されているのか、そしてその立場は適合性と深さを持つていふであらうか。こうした質問をもつて本書を一讀して買えるいくつかの點を列舉して書評に代えたいと思う。

第一に本書の特色は基督教倫理を聖書に於けるイエスの教訓と人格に基礎づけんとする努力をなしているということである。ハルナックやスコット等嘗て所謂自由主義の流れに屬した人々がイエスの神の國の教訓に基督教倫理の基礎を見出したのとその點相通ずるものがある。ハークネスは自らの立場を Evangelical Liberal (福音的自由主義) と呼び聖書を全體として把える點に於て、その終末論的見解や教會觀に於て、かつての自由主義神學

基督教研究 第三十卷・第三號

者と一線をかくしている。しかし彼女自らが言っている様に「基督教倫理はイエスの倫理的觀點に中心をおくものであり」(三一頁)、イエスの倫理を論じている章(五〇頁―六七頁)が本書の原理的中核となっている。

次に倫理學の方法論からハークネスの倫理學を見ると人格主義的目的論(Personal Teleology)又は目的論的人格主義(Teleological Personalism)の色彩が強いと思う。この點ハークネスがブライトマンやヌードセン等の人格主義の流れを汲む神學校の出身であることを反映している。終末論の強調によつて人格主義の陥りやすい理想主義の向上性を如何に乗り越えるかと言う問題が絶えず残存している。一例を挙げれば、民主主義を論ずる際に終末論の限界性を一應説き乍ら、イエスの倫理から人間共同體の理想的原理を挙げた後、「これらは限られて實現されるものであれ、基督教文明の目標であり、若しヨーロッパやアメリカに於て充分に達成されるなら、基督教民主主義は單なるユートピア的な夢ではない」(二二頁)と結んでいるあたり、終末論は人本主義的理想主義の蔭に陰れて薄弱となつている感を禁じ得ない。ここに終末論と具體的倫理の中心的課題があるのだが、本書は餘りその點に深く觸れていない。その點著者の氣負つた抱負にも拘らず本書を讀んで中途半端な印象が残る。中途半端というのは平信者には困難であり、神學者には易しすぎると言つた表現の問題でなく、その問題の分析や追及が不徹底な感じがする。たとえば戦争と平和の問題を扱っている章(一九八頁―二一六頁)をみて、

ハークネスは平和主義の立場をイエスの倫理に基いて取つてゐるが、今日の神學者で義戰の立場を認めるラインホルド・ニーバーやエミール・ブルンナーの立場が充分検討されてゐない。私はあながち後者の説に加擔するものではないが、今日の國際的政治の具體的状況の検討や義戰論の神學的検討が今少し深くなされぬ限り前者の主張は一方的なそしりを免れ得ないと思う。もう一つ例を挙げると基督教倫理と藝術を論じている章があるが(二二八頁以下)、大體ブルンナーが、「基督教と文明」で言つてゐる範圍を越えておらず今日基督教と藝術を語る場合最も中心的な實存主義的藝術作品やモダンアートの勞作等には觸れられず、臺所調度品のデザイン等を論じてゐるあたり(二二九頁)神學者の世帶性をあらわしている。この點ティリッヒが“Existential Aspect in Modern Art” in *Christianity and Existentialism*, edited by Carl Michalsen, 1956 に於いてプロテスタンティズムと藝術について優れた分析を試みているのに比べると對照的である。

とまれ、本書は基督教倫理の各方面にわたる問題を平易に又總括的に福音的自由主義の立場から纏めたとする點に於て價値ある書物である。ハークネスの特色はよき纏め役であり、啓蒙的であるという點にある。ただ複雑な又具體的倫理の課題は、應々にしてきれいに割り切つて了えないものがある。小さくきれいに纏め上げるより、課題として現實の中で大膽に問いつづけて行くところに眞の倫理學の出發があると思う。よき道しるべとしての作品を出された著者に敬意を表し、私自身本書を讀みつつ反省の機會

の與えられたことを感謝したいと思う。(以上三書 竹中)

熊谷政喜著

受肉のロゴス

東京槓書店發行 一九五七年十二月十五月初版

二六九頁 四〇〇圓

著者は青山學院出の東京ベテル教會牧師である。その教會経験によつて、教會の禮拜に於て語られたものを書いた(十三頁)といわれるが、人々に解らせようとする辨證的努力は本文を読むと直ぐ氣づくところである。マルコ傳を除く各福音書記事の講解の形をとりながら、異邦人傳道にまで説き及んでいるが、そのモチーフと方法は、「ブルトマン達の様に、歴史を否定したり輕視したりすることなしで、然もそこで語られている歴史を歴史的歴史としてではなしに『神の言がそこで語られている歴史』として觀てゆこうとする著者の行き方」(十二頁)であり、「聖書の中に『イエス傳』を探そうとはしないで、却つて聖書の中で著者にむかつて、著者の救い主になり來ているキリストに邂逅すること求めている」(五頁)即ち史料をキリストが生きて働く通路(同頁)と觀る事により、キリストとの同時性を求める。

著者は「言の神學」(ヨハネ傳)と「糸圖の神學」(マタイ傳)

は福音理解の支柱だと説くが、(その様に圖式化するのにも問題があるが)兩者が果して充分一つのものを示しているだろう

書評

か。ケリユグマと史的イエスの橋渡しは果して完璧といえるだろうか。(松本卓夫氏は序文にこれを是認しておられる)私は「要らざる饒舌——ナザレの日」の章の中に、その不完全さを見出した。例えばマリヤの詩情豊かな事がイエスの説教に影響したり、子を信じ切る母をもつイエスの幸福を説く(二〇二頁)記事等は一方的に史的イエスを描いて、イエスは神の子らしくない様な印象を受けた。更に最後の「サマリヤ傳道」の章の「六」に於て教會の傳道には二つの支柱があつて、牧師の説教と信徒の立證である。(こゝまではよく)牧師の傳道は論理を語り、信徒の立證では論より證據だ。という風な圖式化的な説き方をする、一面判りがよい様であるが、混迷を招くものとなる。即ち「論より證據」の場合の「論」は餘りよい意味ではない。「證據」の方がよいという意味である。抑々説教は論だけ説くものではないと思う。とすればかかるいい方は不適當のそしりを免れないだろう。尙著者の立場はバルトをしばしば引合いに出される所から、バルトの研究に負う所が多と想像されるが、全體としてバルト以後的な契機を讀みとる事も出來よう。それは辨證的態度である。(二十一頁参照)

亂暴な批評を赦されたい。ともあれ啓蒙的な書物として一般の知識人に推奨しうる新刊良書の一つだと思う。(菅井大果)